BILL VIOLA

Early Video Works

1979-1986

Journey into The Mind

2013.10.12.SAT.
2013.10.13.SUN.

A Program 13:00 -

冒頭に解説あり(15分)

B Program 15:00 -

国立国際美術館 THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA　**国立国際美術館B1階講堂**

第6回 中之島映像劇場　ビル・ヴィオラ初期映像作品集　心の旅路

「美術と映像」という主題に関して、多様な作品を上映会という形でご覧いただこうと、2011年3月に始まった中之島映像劇場。その第6回目は、世界的に著名なビル・ヴィオラの当館所蔵初期映像作品でプログラムを組みました。昨今の美術家による映像メディアの使用の広まりは、ビル・ヴィオラが大きく影響を与えていると考えられます。彼のビデオ映像作品を改めて見直し、「美術と映像」の現在と将来を考えることが目的の一つです。

しかし、この上映会の真の開催意図、それはビル・ヴィオラの作品世界の汲み尽くせぬ魅力を何度も味わいたいということなのです。

ビル・ヴィオラの映像作品の特質については多々指摘出来ますが、その一つとして「持続と変化」が挙げられます。しばしば彼の映像は時間を引き伸ばされ、いわゆるスロー・モーション状態になります。その結果、極く短い時間であっても、あたかも時間の顕微鏡でのぞいたかのように、通常の視覚では見逃してしまうようなものごとの変化が生じているのが見えてきます(もちろん、空間的な拡大鏡の役割も加わっています)。

森羅万象は巨視的にも微視的にも変化しつつ、かつ持続している――それは電子信号の絶えざる流れを基本とするビデオという表現メディアと根源的に親和している――ビル・ヴィオラの作品世界の背景となる一つの思想であると考えられるでしょう。

このようなビデオならではの特質を生かして彼が探求するのは、世界の現れとそれに対峙する人間の姿――そうした場を求めてビル・ヴィオラは世界各地を旅するのですが、同時にそれは自らに課した精神の探求にもなっています。このようなビル・ヴィオラが辿った心の旅路を、私たちは私たち自身で辿り直すことを要請されているのです。

入場無料/全席自由/先着130名(午前10時より当日の各プログラムの整理券を配布/1名様につき1枚)
※各プログラム入れ替え制となります

主催:国立国際美術館　協賛:公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団　協力:ビル・ヴィオラ・スタジオ(Bill Viola Studio LLC)
<国立国際美術館>530-0005 大阪市北区中之島4-2-55　<お問い合わせ>06-6447-4680(代表)　<URL>www.nmao.go.jp/

NAKANOSHIMA SCREEN

関西から 文化力 POWER OF CULTURE

EARLY VIDEO WORKS 1979-1986
JOURNEY INTO THE MIND

Photo: Kira Perov

ビル・ヴィオラ

BILL VIOLA

ビル・ヴィオラ(Bill Viola／1951年、ニューヨーク生まれ)は、シラキュース大学で絵画と電子音楽を学ぶとともに、ビデオによる作品制作に着手します。卒業後、現代音楽のデヴィッド・テュードアと出会ったことも、その後の彼の仕事に関して大きな意味を持っています。
1972年、最初のビデオ映像作品を発表して以後、《聖歌》(1983年)や《パッシング／死》(1991年)などのビデオ作品を多数制作するとともに、《彼はあなたのために涙を流す》(1976年)ほか数多くのインスタレーションも手掛け、ビデオ・アートの世界的な第一人者と評されています。
さらに2000年以降には「パッション／受難」シリーズが始まります。受苦を強いる様々な状況下での人間の行動(身振りや表情)が時間的に引き延ばされ、高精細度の液晶モニター上に表現されます。その結果、作品を見る者の胸中に深い感情を呼び起こすようになります。
ビル・ヴィオラと日本との関係は非常に深く、1980年から1年半滞在し、作品制作を行なう中で、日本の伝統文化と思想を学んでいます。その後もたびたび来日し、展覧会に参加していますが、とりわけ多数のビデオ・インスタレーション作品が展示された、1989年の「第3回ふくい国際ビデオ・ビエンナーレ」が特筆に値します。最近では2006年から翌年にかけて森美術館(東京)と兵庫県立美術館(神戸)で開催された、大規模な個展、「ビル・ヴィオラ:はつゆめ」展が今も記憶に新しいものです。当館他で開催した「液晶絵画」展(2008年)では、彼の初期の代表作《映り込む池》(1977-79年)が出品されました。

国立国際美術館

〒530-0005
大阪市北区中之島4-2-55
TEL 06-6447-4680(代表)

地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」
(3番出口)より西へ徒歩約10分

京阪電車中之島線「渡辺橋駅」
(2番出口)より南西へ徒歩約5分

展覧会情報　本上映会時には以下の展覧会を開催中です。
「貴婦人と一角獣展」「コレクション2」…… 2013年7月27日(土)～10月20日(日)

A PROGRAM 13:00 -

Chott el-Djerid (A Portrait in Light and Heat), 1979
Videotape, color, stereo sound: 28 minutes

Photo: Kira Perov

《 ジェリド湖(光と熱に浮かぶポートレート) 》

(1979年／ビデオ作品／カラー／ステレオ・サウンド／28分)

ビル・ヴィオラは1980年から日本に長期滞在しますが、この作品はそれ以前に制作されたものです。アフリカの砂漠にある塩湖に出現する自然界の現象である蜃気楼と、それを捉える視覚の権化となった望遠レンズ―これらの相克の結果、朦朧とした、幻覚のような映像が生み出されています。

Hatsu-Yume (First Dream), 1981 For Daien Tanaka
Videotape, color, stereo sound: 56 minutes

Photo: Kira Perov

《 はつゆめ 》田中大圓へ

(1981年／ビデオ作品／カラー／ステレオ・サウンド／56分)

滞日の所産として制作された作品の一つで、禅の師であった田中大圓に捧げられています。日本の各所を回り、伝統と現代、山野と都市、光と闇などの光景を収録し、全てを流動する、水の流れのような時空間連続体の中に織り込んでいます。

B PROGRAM 15:00 -

I Do Not Know What It Is I Am Like, 1986
Videotape, color, stereo sound: 89 minutes

Photo: Kira Perov

《 おのれは如何なるものかを識らず 》

(1986年／ビデオ作品／カラー／ステレオ・サウンド／89分)

1980年代後期、作家としての名声が高まっていく中で生み出された初の長編作品です。地球上に存在するのは人間だけではなく、動物も植物も無生物も生存しています。そうしたいわば生態圏において人間は何かという問いが発せられ、その生と死と転生という主題が扱われています。全体は5部に分かれていますが、いずれにおいても作家自身の揺れる眼差しが遍在しています。